

活かされた西アフリカのエボラ大流行の教訓

◆終息に向かっているコンゴ民主共和国のエボラウイルス感染症

2018年4月にコンゴ民主共和国（DRC）で発生したエボラウイルス感染症（EVD）は、5月に都市部で感染が拡大した。しかし、6月に入って新たに確認された感染者数が減り、僻地での感染者の追跡に重点が移される状況にあり、着実に終息に向かっている。18年6月28日の世界保健機関（WHO）の集計によれば、今回の流行による感染者数（疑いのあるものも含む）は55人で、内、29人が亡くなっている。DRCでは、これまでも何度かEVDの流行が発生しており、記録が残っている76年から数えて、今回が9回目の流行となる。

14年から16年にかけて西アフリカ（ギニア、リベリア、シエラレオネ）で大流行したEVDの際の反省から、今回は関係機関の対応も早く、18年5月8日のDRC政府からの報告を受け、5月18日にはWHOの緊急会議が開かれている。

◆西アフリカのエボラウイルス感染症の大流行が残したもの

EVDの対応には、迅速な確定診断が必要になる。今回は、西アフリカの大流行の際に開発された米国の診断機器企業Cepheid（現在は、Danaher傘下）の遺伝子検査機器GeneXpertが主に使われている。GeneXpertはアフリカの各地で結核の診断に使われおり、EVDカートリッジを用いて数時間で診断結果が得られる。

18年5月には、DRC政府はWHOなどの支援を受け、未承認のワクチンrVSR-ZEBOVの使用を開始した。ワクチンは米国製薬企業Merckから寄付されたもので、国際ワクチン共同体Gaviが運用コストを負担している。rVSR-ZEBOVは西アフリカの大流行の際に有効性が示されているが、まだ、正式には承認されていない。

18年6月には、DRC政府がEVDに対する5種の未承認治療薬の例外的使用を認めた。その内の4薬剤であるZMapp、GS-5734、REGN-EB3、mAb114は、DRCに届けられ、使用可能な状況にある。

今回のEVD対策では、DRC政府やWHOをはじめとする国際機関の素早い対応に加え、開発が進んでいる医療技術も投入され、西アフリカのEVD大流行の残した教訓や遺産が活かされている。

【戸潤一孔】